

ESAFS 8 国際シンポジウム 「食料生産と環境保全との調和に向けた農業科学の挑戦」

本国際シンポジウムは、東・東南アジア地域の12の土壤肥料学関連学会の連合による東・東南アジア土壤科学連合（East and Southeast Asia Federation of Soil Science Societies、略称ESAFS）の第8回国際会議がつくばで開催されるのを機会に、当所を含む関係機関（国際農林水産業研究センター、農業・食品産業技術総合研究機構・中央農業総合研究センター、アジア・太平洋地域食糧肥料技術センター（FFTC））と学会（東・東南アジア土壤科学連合、日本土壤肥料学会）の共催で開催されたものです。海外からの参加者100名以上を含め、300名を超える参加がありました。

本シンポジウムでは、現在、東アジアと東南アジアの各国が抱えるさまざまな農業と環境を巡る問題から、「持続的生産のための水管理」「環境ストレス下の作物生産」「土壌汚染対策の新技术」をテーマに、招待講演者による基調講演とそれに関する論議が行われました。

「持続的生産のための水管理」のセッションでは、節水栽培・長期田畑輪換などの土地利用の変化が土壌炭素に及ぼす影響を温暖化ガス放出との関連でどう考えるか、「環境ストレス下の作物生産」のセッションでは、不良土

壤に耐性のある組換え作物が実用段階に達しつつあるがパブリックアクセプタンスを得られるか、等が論議されました。また「土壌汚染対策の新技术」のセッションでは、カドミウム汚染について講演発表がありましたが、カドミウムよりもはるかに広範囲に汚染の生じているヒ素汚染をどう考えるか、などについて論議がありました。

本シンポジウムを機会に、さらなる国際共同研究の展開の輪が広がることが期待されます。



（研究コーディネータ 齋藤 雅典）

公開セミナー「遺伝子組換え作物の栽培と生態影響評価」

11月3日、農業環境技術研究所は農林水産省農林水産技術会議事務局と共催で標記公開セミナーを東京大手町サンケイプラザで民間、行政、大学、法人研究機関などから97名の出席を得て開催しました。

農環研は、平成12年に行われた「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」の「市民の考えと提案」を踏まえ、農林水産省委託研究プロジェクト「遺伝子組換え生物の産業利用における安全性確保総合研究」の一環として平成13年度から遺伝子組換え作物の生物多様性影響評価に関する研究を実施してきましたが、今回その成果の一端を公表しました。

セミナーでは、まず農林水産技術会議事務局の技術安全課長より農水省の今後の遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方および行政・研究・国民間のコミュニケーションの積極的取り組みについて説明がありました。次いで研究担当者から遺伝子組換え作物の生態影響評価に関する研究成果（1. 遺伝子組換え生物の産業利用における安全性確保総合研究、2. 遺伝子組換えダイズとナタネを含む輪作体系が後作、雑草、節足動物、土壌微生物に与える影響、3. 遺伝子組換えトウモロコシの栽培が後作、雑草、節足動物、土壌微生物に与える影響、4. 遺伝子組換え作物の花粉飛散と交雑：知見の集積から評価・予測へ、5. 作物輸入港で野生化した遺伝子組換えナタネの生育地特性と発消長）の発表、そして海外の

研究の現状を知るために招聘したイギリスロザムステッド試験場の研究者から「遺伝子組換え除草剤耐性作物栽培の農地生物多様性に及ぼす影響に関する大規模圃場評価試験」の結果が発表されました。

最後に小林傳司・大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授の司会による円卓会議を、平成12年のコンセンサス会議で活躍した市民パネリストや出席者を交えて開催しました。まず市民からの要望に応えた研究の成果を今回公表したことについて高い評価をいただくとともに、建設的な意見交換を行い、さらに今後の期待や要望も数多く受け、成功裏に終えました。



（生物多様性研究領域長 平井 一男）